

## 序文

学習において、「努力をする」ということは、非効率的で、学んだことを忘れやすい方法であることがほとんどだと聞くと、驚く人が多い。なぜなら、これまで私たちは、「学習には勤勉さ、高いやる気、集中力などが必要である」と聞かされてきたからである。しかし、「学習においては、どれだけ努力しても確実に成功するとは限らない」ということを聞いたことがある人も少なくないだろう。

本書では、学習に関する二つの視点を比較する。一つは、「オフィシャル」理論と呼ばれる、「学習とは作業をすることである」という観点、そしてもう一つは、「私たち人間は努力をせずとも常に学んでいる」という「クラシック」な観点である。普段気付くことはないが、私たちの意識の奥深くにはこのクラシックな観点が埋め込まれており、それを重んじながら生活しているのである。本書では、人間が生まれた時から無意識に行っている、質が高く、複雑で、長期間持続可能な学習を広い視野から観察する。それと共に、この「努力を要しない学習方法」とは逆の考え方が生まれる理由、歴史、そしてそれが教育制度を支配するに至った経緯を考察していく。

また、本書を執筆するにあたって、多方面にわたる精神生活に関しても調査を行った。具体的には、私たちが幼児、子ども、そして大人としてどのように世界を理解し、学び、考え、さらに自分たちのアイデンティティを獲得し、表現するのかを調査した。さらに、すべての教育水準において生じる損害や不公平さについても詳しく説明した。これに関しては、単にオフィシャル理論における「学びは努力を要する」という側面からだけではなく（この場合、学べないということが怠惰さに起因されているため）、テストや成績、計画された競争主義などを含む、学習と教育がはめ込まれてしまった、煩わしく不必要な外部からの支配という面からも考察した。

このようなオフィシャル理論が普及したという事実は、現場外の特別利益団体による利己心の顕著な現れほど陰謀的なものではない。オフィシャル理論は、心理学の研究結果によって助長されると、その後、無批判に教育界に適応され、教師と生徒が学校で行うことを支配することを好む人びとによって精力的に促進されてきた。そして、たいていの場合、これらは利益を生み出すことが目的であった。この理論は、一〇〇年以上も存在し続け、それは常識、または「こうでなくてはならない」自然な理論として広く受容されるのに十分であった。しかし、この考え方は間違っている。それはまさに、挫折や人生における無駄な努力、無益な行為、そして学校での差別を導き、社会を悩ます最悪の社会的態度を促すほど致命的なものである。

まずは、人間に本来備わっている「目立った努力をせずとも継続的に学ぶ習慣」を見直すことか

ら本書を展開していく。ためにならないものも学んでしまうという危険性はあるが、これはまさに人間の脳が持つ力の祝賀である。そして、オフィシャル理論が発達し、恐ろしいほどの支配権を得た経緯は、あまり楽しいテーマではないので、第二章に取っておこう。

最後に、どうすれば学習のオフィシャル理論が及ぼす破壊的な影響から自分たちや子どもたちを守ることができるかを話題にする。さらに、一〇〇年間にわたる支配の後、最終的に無益な理論が、どのようにしてさまざまなものを総崩れにさせ、積み上げられた個人的・社会的損害にピリオドを打つのかに言及したい。

これまで、認知心理学者として、特に言語・学習・理解をテーマに、人間の脳についての研究を二五年以上行ってきた。その間、何百人もの教師・生徒たちと共に世界各国の数百もの学校で働く機会をいただいたが、そこでの研究結果のすべてを本書に集約した。

これらの研究結果は、教師や教育にかかわるすべての人びと（自己教育も含め）に対して選択肢を提示するものである。一つ目の選択肢は、非能率さ、忘却、挫折、教師と生徒の犠牲者化などを生み出す、人間が無理に作り上げた学習理論に追従し続けること、そしてもう一つ目の選択肢は、人間の脳が本来持つ力を認め、それを利用することである。

この人間の脳に本来備わる力を利用するのに最良の時期は、今現在であるかもしれない。「これを読めば何か意義深いことが見つかるかもしれない」と重く構え、すべてを覚える覚悟で本書を読

むことはやめていただきたい。そうすると、最後まで読み終える前に大部分をすぐに忘れてしまう可能性があると同時に、本書を理解するのが難しくなるからだ。

反対に、リラククスして興味の追求のために本書を読んでいたければ、より楽しく、思っている以上に学ぶことができ、自分に必要な情報だけを自然に吸収し、吸収したことを忘れることもないだろう。

一九九八年

フランク・スミス

なぜ、学んだものをすぐに忘れるのだろうか？

——「学び」と「忘れ」の法則——

---

目次

## 序文

..... i

## 第一章 今、どんな教育が行われているのか

..... 3

## 1. 二つの見解からの物語

..... 4

## 第二章 学びと忘れのクラシックな観点

..... 11

## 2. アイデンティティに関する疑問

..... 11

無意識の学び／クラブに参加することの利点

## 3. 子どもの学びの無限性

..... 19

単語がすべてではない／話し言葉クラブへの加入／クラブの特典／

他のメンバーがどのように手助けするのか／自分たちが誰であるのかを学ぶ／

自分たちが誰ではないかを学ぶ／学びは学校でも続く／読むことの利点

## 4. 読み書きクラブに加入する

..... 40

子どもに、子どものために、子どもと読む／何も強制しない著者／

読み書きクラブの内側と外側

5.	人生を通して学ぶ	47
	学びの流れを止める／「学ぶ」こと・「覚える」こと／ クラシックな観点における学びに対するよくある反論	
第三章 学びと忘れのオフィシャル理論		
6.	伝統的な知恵の土台を崩す	66
	学習者のコミュニティ／初めての大きな社会的変化／プロシアとのつながり／ 非難の対象	
7.	学びの理論の加工	77
	問題を探究する中で発見した解決策／無意味な発見／二つの重大な落とし穴／ 教室での大混乱／心理学がもたらしたダブルパンチ	
8.	試験装置の介入	96
	不明解なテストのルーツ／戦争がもたらした結果／テストのまん延／ テストの代替案／教えることとテストのメリーゴーランド	
9.	さらなる戦利品	106
	人間を超えたシステムの勝利／問題解決／月面着陸	

10.	オフィシャル理論のオンライン化	118
	教師にさよなら？／再び言葉に注意／人工知能の台頭／新しい心理学的学説／ オフィシャル理論の批判に対するよくある反論意見	
第四章 損害の修正		
11.	自由に学ぶこと	134
	— 学べることと学べないこと／他の人を助けることで自分を助ける／危険信号	
12.	学校と教育の自由化	146
	— 世界を変える／教育改善のための3ステップの提案／言葉と考え方の変化／ 人びとの考えを変える／不完全な社会での教育／よくある反論（最終版）	
	あとがき	172